

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

チルトナム・フェスティバル2日目(3月13日)のメイン競走に組まれている、ステイブルチエイスマイル路線の最高峰G1クインマザーチャンピオンチエイスマ(芝15F199y)へ向けた前売りで、ブックメーカー各社が1.8倍から2.0倍というオッズを提示し、圧倒的1番人気に支持しているエルファビオロ(驥6、父スバッシュムーン)が、今月のこのコラムの主役だ。

G1クインマザーチャンピオンチエイスマは、22年・23年とウイリー・マリンス厩舎のエナীগメンが連覇しているが、年が明けると10歳になった同馬は、後駆の故障のため、今季は全休することが明らかになっている。

その穴を埋めることが期待されたのが、23年のG1アークルチャレンジトロフィー(芝15F199y)を制したエルファビオロと、同競走で2着となったニッキー・ヘンダーソン厩舎のジョンボン(驥7、父ウオークインザパーク)の2頭だった。

このうちジョンボンは、アークルチャレンジトロフィーの次走、エイントリーのG1マダグハルノーヴィスチエイスマ(芝15F176y)を43馬身差で圧勝すると、昨季の最終戦となったサンダウンのG1セブレレーシオンチエイスマ(芝15F199y)でも、オーブンクラスを相手に3/4馬身差で快勝。今季もここまで2戦し、11月19日にチエル

トナムで行われたG2チルトナムチエイスマ(芝15F199y)を9.1/2馬身差で、12月9日にサンダウンで行なわれたティングルクリークチエイスマ(15F199y)を2.3/4馬身差で制し、破竹の快進撃を続けている。

普通に考えれば、この馬がクインマザーチャンピオンチエイスマの本命でもおかしくないのだが、前売りマーケットでの同馬は、オッズ3.5〜3.75倍の2番人気に甘んじている。

では、ジョンボンを差し置き圧倒的1番人気の座にあるエルファビオロとは、何者なのか。

仏国産馬で、G3アイドプリンテンプス賞(芝4300m)2着馬クロスインハインドの半弟にあたるのがエルファビオロだ。祖国で平地を1戦、ハードルを1戦し、いづれも勝ち星を逃した後、21/22年シーズンから愛国の名門ウイリー・マリンス厩舎に在籍している。

初年度はハードルを3戦し、2勝を挙げた他、G1ベットウエイトップノーヴィスハードル(芝16F103y)2着の成績を残した同馬は、22/23年からステイブルチエイスマに転進。同馬の持つ高い資質が一気に開花することになった。初戦となったフェアリーハウスのビギナーズチエイスマ(芝16F)を19馬身差で制し、ステイブルチエイスマ初勝利をあげると、続くレパー

ズタウンのG1アイリッシュアーケルノーヴィスチエイスマ(芝17F)も10馬身差で快勝し、G1で重賞初制覇。3戦目となったのが前出のG1アークルチャレンジトロフィーで、ここも2着ジョンボンに5.1/2馬身差をつけて快勝。昨季の最終戦となったのが、パンチエスタウンのG1バーバースタウンキャッスルノーヴィスチエイスマ(芝16F)で、ここも11馬身差で制し、4戦4勝の成績でシーズンを終えている。

そして、エルファビオロの今季初戦となったのが、12月10日にコークで行なわれたG2ヒリーウェイチエイスマ(芝16F160y)で、ここも4.3/4馬身で制して、ステイブルチエイスマにおける成績を5戦5勝としている。

極めて能力の高い2マイルチエイサーが、同時期に2頭出現しているのが現在のヨーロッパで、エルファビオロとジョンボンの再対決は、今季の障害シーズンにおける大きな見どころの一つとなっている。

その舞台となるのは言うまでもなく、3月14日のG1クインマザーチャンピオンチエイスマの可能性が高いのだが、一方で両陣営とも、1月20日にアスコットで行われるG1クラレンスハウスチエイスマ(芝16F167y)参戦の可能性を仄めかしている。当面、両馬の動向から目を離せないことになりそうだ。